様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(A)（海外学術調査）
研究期間：2011～2015
課題番号：２３２５１０１４

研究課題名（和文）環日本海北回廊の考古学的研究

研究課題名（英文）A archaeological study on the northern path of Circum Japanese sea

研究代表者
大貫　静夫（Onuki, Shizuo）

東京大学・人文社会系研究科・教授

研究者番号：７０１６９１８４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　37,800,000円

研究成果の概要（和文）：日本列島は海に囲まれているために大陸との交渉の経路は限られている。弥生文化の開始はこの経路によるように、朝鮮半島経由の交渉が一般的であった。北方ではサハリンを経由したルートがあるが、このルートがつねに開かれていたかのような想定もあるが、これまで実証的に解明されてこなかった。今回の課題ではこの北回廊が実質的に機能した時期を特定することに努めた。その結果、完新世の海水面上昇により、北海道とサハリンが切り離されて以降では縄文時代早期の一時期に活発な交渉があったことを考古学的に明らかにした。しかし、その後は続縄文時代に至るまで基本的に閉じたままであったことも明らかにした。

研究成果の概要（英文）： The path of negotiations with the mainland is limited because Japanese archipelago is surrounded by the sea. As the start of the Yayoi culture, negotiations with the mainland thorough the Korean Peninsula were common. In northern there was the another route via Sakhalin but, this route is also contemplated, such as if they were always open, has not been elucidated empirically far. In this project we sought to identify the timing of this northern corridor was substantially function. Our answer is that after Hokkaido and Sakhalin was disconnected because of the rise of sea level only in the Holocene, archaeologically there was only one short time of active negotiation at of the early Jomon period. And after then that path had remained essentially closed up to the epi-Jomon period.

研究分野：東北アジア考古学

キーワード：考古学　サハリン　北海道　縄文時代　アムール川　石刃鏃　新石器時代

１．研究開始当初の背景

旧石器時代にはシベリアと環日本海地域には同じく遊動的な食料採集民がいたが、更新世から完新世への環境変動の中で環日本海（「極東」）地域に定着的な食料採集民が登場し、そのうちの大陸側には「極東平底土器社会」と応募者が呼ぶ新石器諸文化が展開する。

極東平底土器社会の東北部の地域を流れるアムール川は先史社会あるいは民族誌時代のいわゆる山丹交易においても、サハリンを経由して日本列島北部とつながることもあり、環日本海の北回りのネットワークを考えるときには、大陸側のもっとも重要な幹線であった。そのため、平成 9～11 年度（分担者参加）そして平成 13～15 年度（代表者大貫静夫）に科研費をえて、ロシア極東のアムール川下流域及び沿海州地域において、日露の民族学者、建築学者、考古学者が共同で学際的な民族考古学的調査を続けてきた。それらの成果としては、大貫・佐藤編『ロシア極東の民族考古学』（六一書房　2004 年）などがある。次いで、平成 16～19 年度には新たに科研費（代表者大貫）をえて、ふたたび考古学のフィールドに回帰し、ロシア側研究者との共同研究によりアムール川下流域で発掘調査し、新石器時代から前期鉄器時代までの諸文化の相対的な序列及び年代を確定した。また、シベリア地域と極東地域の先史時代における交錯地域であることも明らかにした。

この極東平底土器社会と日本列島の先史文化との関わりを考えるのにもっとも重要な地域であり、かつシベリアとの交渉もあったのが北の回廊の大陸側の窓口である河口部である。この地域はアムール川下流域でもっとも研究が遅れている。そこで、これまでの成果を背景にして、より河口部に軸足を移し大陸と日本列島の間の北の回廊の大陸側の窓口に焦点を当てるのが今回の研究課題である。

２．研究の目的

今回の北の回廊研究では４つの主要な課題を設定する。

（１）アムール川下流域の新石器時代形成期であるオシポフカ文化が北の回廊を経由して日本列島に入り縄文文化を形成したという理解が従来一部にあったが、ロシア側の共同研究者であるシェフカムード氏らの研究により分布は河口部まで広がらないことが明らかとなってきており、このような単純な渡来説は成り立たないことが判明している。後期旧石器時代では北の回廊が日本列島と大陸を強く結びつけていたが、新石器化の過程では北の回廊はそのような役割を果たすことはなかったのであるが、それではその後の北の回廊はどうなっていたのかを考える必要がある。

オシポフカ文化の調査はハバロフスク周辺では多く実施されておりその内容が明らかになっているが、後続する典型的な新石器文化であるコンドン文化への移行過程が明らかとなっていない。また、オシポフカ文化の分布が北に及ばないとした場合、河口部の新石器文化はどのように形成されたのかが大きな問題となる。この両者の問題を解決しうる可能性を持つ遺跡をシュフカムード氏らはコンドン村周辺の分布調査で見つけている。コンドン村はそもそもコンドン文化の標式遺跡があるところであり、この地域でオシポフカ文化段階の遺跡の調査をすることはコンドン文化の成立過程を理解するための鍵となる。

（２）北海道東部の縄文時代早期やサハリン南部の新石器時代には、石刃鏃文化と呼ばれる、北の回廊を経由して大陸に由来すると考えられている段階がある。ところが、それに対応すると考えられているものは、アムール川中流域や沿海州の新石器時代遺物群であり、もっとも肝心の経由地であろうアムール川河口部やサハリン島の対応する段階が分かっていない。北海道で得られている年代はアムール川下流域でもオシポフカ文化より遅く、典型的な新石器文化の成立段階であるコンドン文化の古段階かあるいはその直前の段階に相当する。北海道への石刃鏃文化の流入と連動していると考えられるから、オシポフカ文化が及ばなかったアムール川河口部やサハリン島における新石器時代の成立前後の動態を知ることが重要な鍵を握ることになる。

（３）北海道の縄文文化は弥生文化に移行する本州とは異なり、続縄文文化という別の道を歩むことになるが、対岸のアムール川流域でも新石器時代以後の初期金属器時代に、応募者が「続極東平底土器社会」と呼ぶ新たな段階に変容する。この段階以降、北の回廊は再び活発化するようになるが、やはり河口部の研究は遅れており実態が不明確である。

（４）このような土器、石器による変遷過程の解明には C14 年代測定を行う。この地域では動植物遺存体が残ることはまず無いので、合わせて、土器付着炭化物に対する炭素/窒素同位体分析により、アムール川河口部、サハリン島での時代による食性の変化について明らかにする。そして、これまで調査してきた上流域の分析結果と対比することにより、河口部の生業形態上の特徴を明らかにする。

３．研究の方法

ロシア人考古学者との共同調査により、サハリン及びアムール川下流域で新石器時代の遺跡を調査することで、北海道と大陸を結んでいた北回廊の新石器時代における変遷過程を明らかにする。アムール川下流域の調査ではロシア・ハバロフスク所在のハバロフスク地方郷土誌博物館と、そしてサハリンの調査ではサハリン国立大学との国際共同調査をおこなう。

その際に、土器付着炭化物等の年代測定用の資料を収集し、分析する。
発掘調査以外にアムール川下流域およびサハリンの考古資料を所蔵する大学、研究書、博物館に赴き最新の資料を収集する。

４．研究成果
２の目的の項目で示した当初の研究課題毎にその成果を記す。
（１）かつて一部でアムール川下流域のオシポフカ文化がサハリンを経由して日本列島に入ることで縄文文化が形成されたというような理解があった。代表者らはそのような南下論には以前から否定的であったが、この問題をさらに深く掘り下げることを今回の課題の目的の一つとした。
そのため、オシポフカ文化がアムール下流域でどこまで北に拡がるかを知る必要があり、かつオシポフカ文化から既知の最古の新石器文化の段階であるコンドン文化への移行過程を知る必要がある。
そのため、2011 年にハバロフスク州郷土誌博物館との国際共同発掘調査をコンドン村のヤミフタ１遺跡で実施した。当初は上の目的に記したようにオシポフカ文化の北限を知る遺跡と考えていたが、調査の結果、ヤミフタ１遺跡で我々の得た資料はオシポフカ文化そのものではなく、アムール川下流域における土器出現期のオシポフカ文化から新石器時代コンドン文化への移行の過程を示す、それら二者の間にあった従来の空白を埋める貴重な試料であることが判明した。アムール川下流域では旧石器文化から新石器文化への移行がかなり連続的に追えるようになったのである。
これによって、アムール川下流域における石刃鏃石器群の出現過程がより詳しく分かるようになった。そして北海道東部の縄文時代早期石刃鏃石器群出現の背景を考えるのに重要な資料を得ることができた。この資料を指標として、われわれは「ヤミフタ文化」を設定することにした。その報告は大貫静夫監修　2014　『環日本海北回廊の考古学的研究（Ⅰ）』に掲載している。
また、今回の課題遂行時の遺跡踏査および各地収蔵資料の調査から、オシポフカ文化の北限がやはりコンドン村付近であり、河口域まで及ばないことは再確認した。
ヤミフタ文化の存在を明らかにしたことで、オシポフカ文化がアムール川下流の新石器文化の母体になったことが明らかになったが、他方で、その分布の北限から考えて、日本列島の新石器文化の母体となることはなかったことがより明らかとなったのである。
（２）縄文時代早期の北海道東部に出現する石刃鏃石器群を以下に理解するかが次の課題であった。
これに関連して我々はサハリン島で二箇所の国際共同発掘調査をサハリン国立大学とともに実施した。
これまでサハリン島では宗仁文化がもっとも古い新石器時代の文化であったがそれには石刃鏃石器群が伴っていなかった。スラブナヤ 5 遺跡では以前の調査でおそらくそれに先行する石刃鏃石器群が見つかっていたが、伴う土器が判然としていなかったので調査をおこなった。詳細は下記の調査報告（福田等 2015）に掲載している。　また、2014 年 2 月 15 日、16 日、東京大学において、「環日本海北回廊における完新世初頭の様相解明―「石刃鏃文化」に関する新たな調査研究―」研究集会を開催し、下記の同名の論集を刊行している。
遺跡の遺物は大きく宗仁式土器の段階と石刃鏃石器群を伴うより古い段階の二群に分かれていた。今回の調査でも土器の出土は断片的であったが、1 群の宗仁式に先行する 2 群の土器は無文、条痕文であり特徴に乏しい。その 2 群の炭素年代は道東の石刃鏃石器群に伴う土器の年代とほぼ同じであるが、浦幌、女満別式のような文様を持たない点で異なる。我々の年代測定では隣接するスラブナヤ４遺跡の無文、条痕文土器の年代がサハリン南部ではもっとも古い段階となり、北海道道東地域最古の縄文土器である暁式土器の年代とほぼ同じ段階であることも明らかにした。
スラブナヤ 4，5 遺跡とも石刃鏃石器群を伴い、道東の石刃鏃石器群との共通性がうかがえ、石材に道東の黒曜石が用いられることからもサハリン南部と道東間の密接な関係が想定される。かつ、それらと大陸に知られる石刃鏃石器群との地域差も見いだせる。さらに、サハリン南部と道東間にも地域差はある。このような類似と差異はこれら諸地域の石刃鏃石器群がある中心からの植民というような単純な人の移動では説明できないことを示す。外的な要因と内的な生態適応という両面から考える必要がある。
2014 年にはさらにサハリン島の中部にあるアド・ティモボ２遺跡を調査した。ここからはアムール川下流のコンドン文化の土器に近い文様をもつ土器が出ている。道東の石刃鏃石器群に伴う女満別式土器の文様はコンドン文化などのアムール編目文に由来すると以前から考えられてきたが、その中間をつなぐ資料がなかった。その空白を埋める資料であり、炭素年代も女満別式と重なる。ただし、この土器は女満別式ではなく、どちらかと言えばコンドン文化の土器に近い。
全体として、東北アジアの石刃鏃石器群ではアムール川流域にもっとも古く出現し、次いでサハリン島、北海道東部の順になる。その点では単純な南下、植民論になりそうだが、今回のような実態把握からすると、個別生態系への個別適応という側面も強いことが判明したのである。
（３）オホーツク文化成立頃からふたたびサハリンを経由する北の回廊が機能するよう

になるが、その直前の段階にアムール川河口域からサハリン島北部にかけてバリシャヤブフタ文化の尖底土器が拡がる。その時期の方形竪穴住居址をウディリ湖岸ゴールィムィス６遺跡で 2012 年に調査した。オホーツク文化の形成に重要な役割を果たした鈴谷文化の成立に関与したと考えられる段階であり、貴重な類例を追加できた。
（４）今回の課題遂行中多数の土器付着炭化物の年代測定を行った。その結果、同一層の木炭の測定値と比較することで、この北辺地域ではどこでも付着炭化物の年代値は海洋リザーバー効果により古くなっていることが分かった。これは当時の人々がサケ・マスなどの海産資源を食料としていたことを示している。

従来の東北アジアの中の日本先史文化論は、島国である日本列島に大陸から次々と新たな文化が渡来するという起源・伝播論的視座に立脚してきた。そのために、根拠が乏しいにもかかわらず環日本海の北回廊は大きな役割を担わされてきた。しかし、中世にオホーツク文化が北の回廊を覆うようになる以前は上述の石刃鏃石器群の時代を例外とするならば斉一的な文化が北の回廊を覆うようなことはなかった。
そして、その石刃鏃段階でさえ、サハリン島南部は大陸よりは北海道との結びつきが強かったことがあきらかにできた。ただし、一部の石器や土器には大陸との結びつきを示すものも判明しており、サハリン島を経由する北の回廊についての理解にとって重要な知見を今回えることができた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）
大貫静夫　中国・朝鮮半島の土器出現期　季刊考古学　132 号　79－82 頁　2015　査読無し。
佐藤宏之　旧石器から縄文へ　季刊考古学 132 号　14-17 頁　2015　査読無し
福田正宏　道東の石刃鏃文化　季刊考古学 132 号　79－82 頁　2015　査読無し。
福田正宏・グリシェンコ,V・大貫静夫.他　サハリン新石器時代前期スラブナヤ５遺跡の発掘調査報告　東京大学考古学研究室紀要 29 号　121-146 頁　2015　査読無し
Dai Kunikita, Igor Shevkomud, Kunio Yoshida, Shizuo Onuki et al. Dating charred remains on pottery and analyzing food habits in the Early Neolithic period in Northern Asia, Radiocarbon vol.55,1334-1340pp.,2013,査読あり
福田正宏　北海道とサハリン　季刊考古学 125 巻 62－65 頁　2013　査読無し

〔学会発表〕（計５件）
大貫静夫　2015　文化史考古学から見た北海道縄文時代早期の環境変動　第 16 回北アジア調査研究報告会　2015 年 2 月 22 日　東京大学（東京都・文京区）。
大澤正吾・I.シェフコムード・福田正宏・大貫静夫他　アムール河口域ダリジャ湖遺跡群の考古学的調査（2013 年度）第 15 北アジア調査研究報告会　2014 年 3 月 1 日　札幌学院大学（北海道・札幌市）
大貫静夫　アムール川流域新石器時代研究の新たな成果（招待講演）　第 11 回環東海考古学研究会学術発表会　2012 年 1 月 28 日 木浦市（韓国）
大貫静夫・I. シェフコムード・福田正宏・熊木俊明他　東部極東平底土器の形成過程について－2011年度コンドン１遺跡の調査から－　第 13 回北アジア調査研究報告会 2012 年 2 月 12 日 東京大学（東京都・文京区）
福田正宏 アムール川下流域における考古学研究最前線　公開シンポジウム「縄文早期を考える」2011 年 12 月 17 日 東北芸術工科大学（山形県・山形市）

〔図書〕（計２件）
大貫静夫・福田正宏編　『環日本海北回廊における完新世初頭の様相解明』東京大学人文社会系研究科考古学研究室　124 頁　2014
大貫静夫監修　『環日本海北回廊の考古学的研究（Ⅰ）：ヤミフタⅠ遺跡発掘調査報告書』東京大学常呂実習施設研究報 11 集　160 頁 2014

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等　なし

６．研究組織
(1)研究代表者
大貫　静夫　　（ONUKI　SHIZUO）

東京大学・人文社会系研究科・教授
研究者番号：70169184

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
佐藤　宏之　　(SATO　HIROYUKI)
東京大学・人文社会系研究科・教授
研究者番号：　50292743
福田　正宏　　(FUKUDA　MASAHIRO)
九州大学・人文科学研究院・助教
研究者番号：　20431877
熊木　俊明　　(KUMKI　TOSHIAKI)
東京大学・人文社会系研究科・准教授
研究者番号：　20282543
国木田　大　　(KUBIKITA　DAI)
東京大学・人文社会系研究科・助教
研究者番号：　00549561